

矢島 さとる

桜美林大学大学院国際学研究科老年学専攻 博士後期課程

小学校の世代間交流に関する質的研究：学校支援ボランティアの評価

研究目的：本研究は、地域の中高年者によって担われている小学校に対する学校支援ボランティア活動に着目し、学校支援ボランティア（中高年者）、小学校児童、教員それぞれにとって、この活動に関係することがどのような効果をもたらしているのか、その背景となる要因は何かを、質的なデータに基づいて探ることを目的とした。

対象と方法：学校支援ボランティア、児童、教員を対象群としたフォーカスグループインタビュー（以下 FGI）によって質的なデータを収集した。対象者は、首都圏において学校支援ボランティア活動が定着している 3 つの小学校の学校支援ボランティア、児童、教員であり、各群それぞれについて 3 から 4 グループの FGI を実施した。FGI の参加者は、各群それぞれ 25 名、23 名、22 名であった。FGI の逐語録を基に、各群のデータについてそれぞれコーディング、カテゴリー化をおこない、各群の効果について一連のカテゴリーとサブカテゴリーを抽出した。また、それぞれのカテゴリーの背景要因について、逐語録から読み込みを行なった。

結果と考察：ボランティア群、児童群、教員群の各群について、それぞれ 5 領域、4 領域、5 領域の効果のカテゴリーが、サブカテゴリーとともに抽出された。支援提供者である中高年者は、精神面、社会的関わり、学習などに多様な効果と人生の意味づけを認識していた。児童と教員もボランティアによる支援からの効果を認識しており、支援の受け手からも一定の評価を受けていることがわかった。また、そのような効果は、学校支援ボランティアの導入により例外なくもたらされるものではなく、関わるものの個人的資質や問題関心、ソフト、ハード両面での環境条件など、多くの背景要因によってもたらされていることが推察された。